

ロシアの協同組合思想の先駆者としての

N. G. チェルヌィシェフスキイ

今 井 義 夫

はじめに

1. 「新しい志向」と歴史的共同体との結合
2. 「勤労者の理論」と「協同組合計画」
3. 共同体から社会主義的協同組合への移行
4. 初期協同組合運動への影響をめぐって

むすび

N. G. Chernyshevsky: Pioneer of The Russian
Cooperative Ideas

Yoshio IMAI

Foreword

1. Combination of “New Aspiration” and The Historical Commune
2. Chernyshevsky’s “The Theory of Working People” and “The Plan of Cooperative”
3. Transition to Socialistic Cooperative from The Commune
4. Chernyshevsky’s Influence on The Early Russian Cooperative Movement

Conclusion

はじめに

今日、チェルヌィシェフスキイ (Н. Г. Чернышевский, 1828-1889) をロシアの革命的民主主義者、ナロードニキの先駆者としてその名を知る人は多い。しかし、それにくらべて、彼をロシアの協同組合思想の先駆者として注目し、その視点から彼の思想を検討した労作はわが国はじめ、欧米でもソ連でもきわめて少ないように見受けられる。

しかし、彼の政治思想小説ともいふべき『何をなすべきか』(1862年)を読めば、その中の主人公たちが社会改革のための手段として協同組合を特に重視していることに気づくであろう。事実、チェルヌィシェフスキイの社会主義思想は協同組合思想と不可分の関係にあり、本来、協同組合社会主義ともいふべき内容をもっていた。そして、彼の思想はその後のロシアにおける協同組合思想や社会主義思想の発達に大きな影響を与えたのである。

本報告においては、1857年から1860年にかけてのチェルヌィシェフスキイの著作¹⁾の中での社会主義的協同組合思想がいかなる状況のもとでつくられ、どのような内容と性格をもっていたかを明らかにするとともに同時代への影響について、二、三の例を提示することにする。そのような作業はチェルヌィシェフスキイの思想とその歴史的意義をより正確に理解するために有益であろう。

本論に入る前に本報告のテーマにかかわりのある従来の研究について簡単にふれておきたい。筆者の知る限り、チェルヌィシェフスキイと協同組合の関連についてのモノグラフは、1917年に当時のペトログラード (現在のレニングラード) の協同組合研究所長だったコンスタンチン・パージトノフの啓蒙的小冊子『ロシアにおける最初の協同組合理論家エヌ・ゲー・チェルヌィシェフスキイ』²⁾ (1917年) のみである。英文によるチェルヌィシェフスキイ研究書では、フランシス・ランダール、W. F. ヴォーリン、N. G. O. ペレイラの三著はそれぞれチェルヌィシェフスキイの協同組合理論に言及しているが、独立のテーマとしてではない。アレクサンダー・クチェローフ氏 (A. Kuchеров) の学位論文、*N. G. Chernyshevsky on Capitalism and Russia's Shortcut to Socialism* は、筆者の知る限りこのテーマについての比較的詳細で有益な記述を含んでいる。しかし、同氏の主要な関心はチェルヌィシェフスキイの経済理論の分析であって、チェルヌィシェフスキイの政治的変革論としての協同組合論についてはあまり言及されていない。

日本における最近のチェルヌィシェフスキイ研究では、石川郁男氏と渡辺雅司氏³⁾ がそれぞれ彼の共同体論をとり上げて、その中で協同組合にも言及している。また副

島種典氏⁴⁾がチェルヌィシェフスキイの経済理論をとりあげているが、それらはいずれもとくに協同組合論としての関心をもって書かれたものではない。

この報告は、従来、ロシア社会思想史を研究しつつ、そこにあらわれたロバート・オウエンの思想の影響に注目してきた筆者の個人的関心の成果であるが、その内容については、筆者自身が編者・執筆者として参加し、1980年1月に『チェルヌィシェフスキイの生涯と思想』⁵⁾(1980年)と題して出版された書物の執筆者たちの教示に負うところが多い。

(注)

- 1) 本論文中に引用するチェルヌィシェフスキイの著作からの引用は、下記のソビエト国立出版所版16巻全集に依拠し、その引用個所には、全集の巻数をローマ数字、ページ数をアラビア数字で()内に示した。

N. Г. Чернышевский: Полное собрание сочинений в шестнадцати томах. Москва, 1939-1953.

訳文については、石川郁男氏の訳書を参考にした。

- 2) К. Пажитнов: Н. Г. Чернышевский, как первый теоретик кооперации в России, 3-е издание, Московского союза потребительных обществ. Москва, 1917.
3) 石川 郁 男:「チェルヌィシェフスキイの農村共同体論」『茨城大学政経学会誌』第23号(1968)所収, その他。

渡辺 雅 司:「偏見批判の体系としてのチェルヌィシェフスキイの共同体論」——後進国型社会主義化への一つの試み——『経済と経営』(札幌大経済学会)第7巻第1号(1976)所収, その他。

- 4) Tanenori Soejima, "Chernyshevsky—A Severe Critic of Capitalism and Classical Political Economy." «Japanese Slavic and East European Studies» Vol. 3. 1982, p. 48.
5) 『N. G. チェルヌィシェフスキイ——その生涯と思想——』金子・細谷・石川・今井編著, 社会思想社. 東京, 1980.

1. 「新しい志向」と歴史的共同体の結合

チェルヌィシェフスキイの協同組合理論は、19世紀60年代のロシアで提唱され、彼の社会主義思想の基礎的部分を成している。

当時、ロシアはクリミア戦争の敗北(1856年)によってその旧体制の欠陥を露呈した。新帝アレクサンドル二世自ら旧体制の最終的破局を避けるために「上からの改革」を決意しなければならなかった。農奴農民の解放が避けられないものとなり、政府による農奴制改革案の準備が進められた。

検閲が多少とも緩和された1857年から、チェルヌィシェフスキイは『ソヴレメンニク(現代人)』誌上で、農奴解放問題を中心とする社会経済問題に急進的な論陣を展開

している。彼は、はじめ、農奴農民の土地付完全解放のために自由主義者たちと連帯して保守的地主層との対決を試みていたが、やがて、改革後のロシアの進路をめぐって、自由主義者たちと対立するにいたる。彼はロシアの資本主義化は必然的に農民大衆のプロレタリア化を招くとしてこれに反対し、農村共同体の保持とこれを基礎とする社会主義化を主張した。この過程で彼の協同組合論が提起されるのである。

チェルヌィシェフスキイが西欧における「新しい志向」という名のもとに社会主義について論ずるのは1857年からのことである。『ソヴレメンニク』誌1857年第5号に掲載された4月の雑誌評の中で、彼は西欧に現われた「新しい志向」について、その歴史的背景と内容について次のような解説を試みている。

西欧では個々人の私的権利の保障は高度に実現され、所有権はもっぱら個人の手に移って、強固に保護されている。しかし、この個人の排他的権利の一面性と欠点が国民の産業（農工業）や生活の上に重くのしかかっており、今やイギリスおよびフランスの人口の90パーセントにとって極めて不自然で苦しい事態となった。そのためかつての一面的な理想の欠点を取り除くような新しい志向があらわれざるを得なくなった。（Ⅳ．739）

新しい志向の内容についての彼の説明は、政府の検閲のために多くの部分が削除された。次の引用のうちアンダー・ラインの部分がそれである。

「個々人の権利にかんする観念と並んで人びとのあいだの連合（союз）と同胞愛（братство）に関する思想が発生した。人々は共通の利害をもち、すべてにとってもっとも有利な生産のために、また生産される価値の経済的な消費のために、自然の力と科学の手段とを共同で利用する共同体（общество）に結合するに違いない。同胞愛は農業においては土地の共同体的利用への移行によって、工場においては工場で働くすべての仲間の共同体的所有物への工場経営の移行によって表現されるに違いない。そして、経済生産のこの新しい制度だけが、たとえばフランスやイギリスの種族全体に福祉をあたえ、数百万人の貧乏人に囲まれた数千人の金持から成るこれらの国の住民を、贅沢は知らないが、幸福な暮しを享受する単一の人々の集団に転化させることができる。」（Ⅳ．740）

そこには、チェルヌィシェフスキイが学生時代から親しんできた西欧のユートピア社会主義思想の影響が明瞭に表われている。

彼は同じ評論の中で「新しい志向」について、それが「西欧に出現し、その出現に

よって世界史に新しい時代をもたらしている」(Ⅳ. 738)と記し、さらに「連合的な生産と消費への新しい志向」(Ⅳ. 740)と呼んでいる。彼の社会主義についての理解が、このように協同組合的であるのは、彼が当時共鳴した西欧の社会主義者たち、サン・シモン、フーリエ、オウエン、ルイ・ブランおよびプルードンなどの教理の中で協同や連合の理念が重要な内容を成していたからであろう。その意味でもチェルヌィシェフスキイの社会主義は自ら協同組合的社会主義にならざるを得ない事情をもっていたのである。

チェルヌィシェフスキイは、この西欧の新しい志向の説明の中で、それは「ロシアが適切な時期に摂取すべき重要なものである。」(Ⅳ. 738)と記している。この認識は、彼がロシアにおける資本主義化がはじまり、農民のプロレタリア化が差し迫っているという危機感を深めるとともに次第に強化されてゆく。

チェルヌィシェフスキイがゲルツェンと同様にロシアの伝統的な農村共同体(オーブシチナ)を農民のプロレタリア化の防壁とみなし、それを基礎としてロシアに独自の社会主義を創出しようと考えたことはよく知られた事実である。彼もゲルツェンと同様に、農村共同体の共同所有習慣は、ロシアの特色であり、西欧よりも社会主義を受け入れ易くしている有利な条件と考えた。しかし、彼は農村共同体をスラヴ主義者やゲルツェンのように西欧文化とは異質的でスラヴ文化にのみ固有な制度とは考えなかった。彼はこの点については自ら「われわれが擁護している共同体についての見解は、西欧の科学に属するものであって、スラヴ主義者に属するものではない」(Ⅴ. 617)と認めている。

他方、西欧社会の老衰と没落について語ったゲルツェンを批判して、彼は西欧はまだ老いておらず、スラヴから学ぶべきものは何もないとも記している(Ⅴ. 615)。彼にとって、ロシアの農村共同体は、ロシアの歴史的発展の遅れがもたらした歴史的遺制とみなさるべきものであった。実は、そのことによってかえって、彼はロシアの農村共同体を西欧の社会主義者たちが目ざしている社会主義的共同体へと発展させる可能性についても論証することができたのである。

チェルヌィシェフスキイが後に彼の「共同体的所有にたいする哲学的偏見への批判」(1858年)の中で展開した、社会主義への飛躍的發展を内容とする発展史観にはその実現のための基本的命題があった。その一つは「発展の最高段階は、形態的にはそれが出発する端初と合致する」(Ⅴ. 363)という命題である。それはロシアの原初的共同体と高度に発展した共同体すなわち社会主義社会との原理的な共通性に注目した彼の弁証法的歴史認識の現われである。第二の命題では「社会生活の或る現象が、

先進諸国において到達した高度の発達の影響のもとで、他の国民において非常に発達し、中間の論理的モメントを避けて、最低の段階から直接に最高の段階にのぼることができる」(V. 389)と規定されている。それは、経済的に未発達な国がある条件のもとでは中間的段階＝資本主義階段を飛び越して社会主義段階へと飛躍することを可能とみる理論である。後進国の発展理論としても今日なお注目すべき先駆的内容をもっている。

上記の引用の中で、「先進諸国民において到達した高度の発達の影響のもとで」という部分の意味については、その理解は論者によって必ずしも一様ではない。かつてソビエトの史家の中には、それを西欧諸国における革命の影響とみなした者もあったが、今日では、そのような説をとる者は少ない。ソビエト史家G. ヴォドラゾフ氏は、近年の著書の中で、これを西欧の先進技術と経済からの影響とみなしている¹⁾。この点で日本の渡辺雅司氏は技術に限っている²⁾。しかし、クチェロフ氏は、その内容を西欧からの技術的経験と社会主義思想の影響とみなしている (Kucherov. 前掲論文 p. 206)。

私は、先進技術や経済以外に社会主義の思想的影響を見るクチェロフ氏の意見には賛成であるが、しかし、社会主義思想の内容をより広く、社会主義的思想と運動の諸経験とし、その中に協同合組思想と運動も含めるべきだと考えている。この頃、チェルヌィシェフスキイにとって、初源的な共同体から高度の共同体への移行期(過渡期)の重要性が認識されており、その期間、資本主義的企業体に対抗し、これに代わるためには、理論的にも現実的にも協同組合の存在が不可欠の条件と見られていた。

しかも、それは単に中間的な媒介項としてではなく、それが体現している「協同の原理」の発展そのものが社会主義の実現を意味していたのである。歴史的な共同体としての農村共同体は近代的な協同組合への転換を経ることによって、はじめて高度な社会主義的共同体の構成要因になり得るという意味で両者の結びつきが理解されているのである。その内容は次章以下で検討したい。

(注)

1. Г. Г. Водолазов: От Чернышевского к Плеханову—об особенностях развития социалистической мысли в России—. Издательство Московского Университета, 1969. стр. 60.
- 2) 渡辺雅司:「偏見批判の体系としてのチェルヌィシェフスキの共同体論—後進国型社会主義化への一つの試み—」『経済と経営』(札幌大学経済学会) 第7巻第1号(1976) 参照。

2. 「勤労者の理論」と「協同組計画」

チェルヌィシェフスキが私的所有と無制限競争の原理にもとづく資本主義体制に代わるものとして、共同所有と協同の原理にもとづく社会主義体制について、自らの理論を本格的に展開したのは、1860年の「資本と労働 (Капитал и труд)」においてであった。この書の中で彼は、自由主義経済学者イワン・ゴルロフの『経済学原理』第一巻 (1859年) への批評の形をとりながら、アダム・スミス以来の自由主義経済理論を「古い理論」と呼び、これにたいして、自らの理論を「新しい理論」と呼んで、「資本家の理論」にたいする「勤労者の理論 (теория трудящихся)」とみなしている。

「勤労者の理論」は、その名が示すように、勤労者の利益にたつて彼らの独立を実現するための諸原理を明らかにする経済理論である。チェルヌィシェフスキによれば、それは、アダム・スミスやリカードの理論を無条件に非難するものでなく、むしろその思想の徹底的な理論的發展から生まれたものである。彼の説明によれば「それは第一に古い理論が諸国民の間の交易上の協同 (товарищество) を説いたのにたいして、同じ協同の原理を勤労者の各グループのために提起したものである。第二にそれは古い理論が、あらゆるものが労働によって生産されたとした見方をひきついで、それゆえに、あらゆるものは労働に属さねばならないと主張する。第三に古い理論が社会の価値量をその生産物によって増加しないようないかなる仕事をも非生産的であるとしたのにたいして、それはつましい経済にふさわしい社会的需要を充たすために必要な生産物を与える労働以外は、いかなる労働も非生産的であるとみなす。最後に古い理論が労働の自由と言うのにたいして、それは勤労者の独立ということをつけ加える。」(Ⅶ. 56-57)

チェルヌィシェフスキは、この「勤労者の理論」の結論として、勤労者の独立のためには、協同 (товарищество) 以外になく、勤労者はそのために組合形態をとるべきだと主張する (Ⅶ. 54)。しかも組合形態は、改良された新しい生産単位の大規模化に適応し、勤労者の自らの人間的欲求にもとづいて行われる経営なので、資本家的経営よりもうまくゆくに違いないとされている。

「勤労者の理論」の理論的性格としては、労働価値説にもとづいて労働全収権を主張している点で、同時代のリカードウ派社会主義者の理論を思わせる。また、人間の生活における物質的福祉や環境を重視する点ではフォイエルバッハの唯物論的人間学にもとづいており、さらに協同組合的共同体を理想とする点ではロバート・オウエンからの強い影響がうかがえる。

「資本と労働」の中で、チェルヌィシェフスキイが提示している協同組合のモデル構想は、彼のいう「協同の原理」の具体化として重要である。これによって、彼が、自由でかつ生産的な勤労者のための協同組合社会について、その形態や構成、機能などをいかに考えていたかを具体的に理解することができるからである。次に彼の叙述に従って、その概要を示すことにしよう。

まず、協同組合の設立に当っては、政府の財政援助を受けて発足し、その初年度には組合は政府が派遣した管理人の指導をうけることになっている。ただし、政府からの貸付金はその後組合の利益から利子をそえて返還されることになっており、政府の財政上の干渉はない。

組合設立に際して組合員は募集される。その人数は男女あわせて、1500～2000人で家族持ちが優先され、各組合は成年男女 500 人以上の働き手をもっている。彼らは管理人の同意をえて組合に参加し、加入と脱退は本人の自由である。

組合の工場、施設などの建物は、費用のかからない廃屋や中古の建物を改修して使うことによって組合の負担を減らす。建物には組合の力に応じた農業用の耕作地などの付属地が付く。

住居は質素だが、必要な設備と部屋数はそろっている。大きな共同の建物を好まぬ者は、自分で好きな住居を借りて住むことも認められていて、強制的な規約はない。

組合には、教会、学校、劇場および音楽会や夜会のためのホール、図書館、その他病院などが付属施設として整えられる。

組合は農業にも、またそれぞれの地方に適した採取業や工業にも従事する。そのために必要な道具、機械および原料は組合の費用で購入される。

農業については農繁期には全組合員が農業に従事し、農閑期にそのほかの職業や仕事に従事する。しかし、この場合にも強制はなく、希望する仕事に従事できる。どの職業にも、その種類と地位に応じた慣習上の賃金がある。

組合員の職業選択は自由であるが、組合は組合員にとって必要な職業の人材を募集し、これに仕事場を与える。

管理人の権限は、各職業ごとに選出された管理委員会の合意にもとづいて行使される。

全組合員は総管理委員会を選出し、それが管理人および彼の選んだ補助管理人を絶えず監視し、その同意を得なければ組合ではなにも重要なことはおこなわれな

い。

組合の設立後一年経って、組合員がその経営の経験をつむと、政府の任命した管理人の権限は完全に廃止される。二年目から組合の事業のあらゆる管理は組合自体に移される。組合員は自らの管理人を選出し、規約の改正も行える。

労働者は組合から賃金を受けとるが、もし労働者が著しく怠惰な場合には、組合はこれを解雇することができる。しかし、組合では労働者が、自らの利益に参加しているので、私企業の労働者よりもずっとよく仕事をすると考えられている。

組合経営から生じた利潤は、その一部を組合の社会施設の維持のためにあてる。他の一部は国庫からの貸付金の利子の支払いと貸付金の償却にあてられる。第三の部分は、いろいろな不慮の出来事からの保険となる組合の予備資本にあてられる。残りの部分は全組合員にその労働日数に応じてそれぞれ配当される。その金額は相当大きなものと予想されている。

組合は組合員の消費生活についても便宜を提供する。生活必需品は、組合の売店から普通の小売価格よりもずっと安い卸売価格で買うことができる。組合員は安い料理を提供する共同炊事場から自宅に料理をとりよせることができる。また希望する者は、さらに安い共同食堂で食事をとることもできる。(V. 58~63)

以上のようなチェルヌィシェフスキイの協同組合プランの意義をどのように考えるべきであろうか。

クチェロフ氏はこのプランを、チェルヌィシェフスキイが専ら西欧諸国を念頭に置いて構想した、協同組合の初歩的な形であって、彼の社会主義的協同組合の最終的な姿ではないことを指摘している(同氏論文 p. 169)。また、それが主に非工業的な農業セクターの協同組合として描かれていると考えているようである。

副島教授は、近年の論文の中で、この組合モデルに言及して「われわれはユートピア・ソーシャリストたちによって構想された“新社会計画”のひとつのバリエーションに過ぎないと思えるべきでない¹⁾」として、これが、勤労者の共同体の可能性を経済学的に検証したものと考えておられる。

筆者はチェルヌィシェフスキイがこのプランによって意図したのは、経済学的な可能性の検証であるとともに、それ以上に、組合共同体がそこに生活する個人の自由を侵かさず、むしろそれを最大限に保障する組織であることを示すことによって、自由主義者の批判から協同組合的社会主義を擁護することにあつた²⁾と考える。また、このプランは単に非農業セクターの組合として示されたものでなく、農業と工業を併せ

もった自足的な共同体として構想されたものと理解するのが妥当であろう。筆者は、このプランが農業セクターに限定されず、むしろ工業を含むオウエン的組合モデルとして示されたことに積極的な意味があると考えます。

そのことと関連して、筆者は、この協同組合プランの発表される前年に、彼の雑誌『ソヴレメンニク』誌上にドブロリューボフがオウエン追悼論文「ロバート・オウエンと彼の社会改革の試み」³⁾を発表していること、および、同誌の1860年4月号に、イワン・コノパヴィッチの匿名記事「ロッチデール相互扶助協同組合」⁴⁾が掲載されていることに注目したい。前者はオウエンの生涯と事業に関する紹介であり、文末には「社会の合理的組織と理性的宗教の発見者、創始者ロバート・オウエンのマニフェスト」⁵⁾のロシア語が付加されている。ドブロリューボフのこの論文は、その文体が拙いという批評もあるが⁶⁾、その内容はオウエンの紹介としては当時ロシアにおいてもっとも早く、かつ本格的なものであったし、オウエンの思想と社会改革の実践についての彼の熱烈な共鳴を示した、注目すべきものであった。後者はロッチデールにおける勤労者の互助的な協同組合運動の社会的背景と彼らの業績をたどり、その成果を伝えた詳細な報告である。いずれもロシアの読者たちに、イギリスにおける資本主義下の労働者の窮状と階級的自覚、さらにオウエンや協同組合運動家たちの理論と運動について紹介したもので、歴史的にも価値あるドキュメントである。

当時、これらの記事を掲載した雑誌『ソヴレメンニク』の編集に当たっていたのがチェルヌイシェフスキイであった。そのことからしても、彼がイギリスの当時の協同組合運動の動向に強い関心をもっていただことがうかがえる。同じ時期に彼が論文「資本と労働」を書き、協同組合の原理と自らプランを提起したこと、そして、そのプランがオウエンの共同体プランと類似していたことは単なる偶然とは考えられない⁷⁾。

「資本と労働」を書いた頃、彼はすでにオウエン的な共同体の実験が相次いで失敗していた事実は知っていたと思われる(コノパセヴィッチの論文はそのことに言及している)。しかし、彼にとってはなによりも重要なのは、ロシアにおける資本主義の浸透に対抗できる勤労者の生産協同組合的共同体の創設が目標であり、そのため、オウエン的な生産協同組合が関心の中心となったのであろう。

(注)

- 1) Tanenori Soejima "N. G. Chernyshevsky—A Severe Critic of Capitalism and Classical Political Economy" JSEES., Vol. 3, 1982.
- 2) 拙稿:「ロシア改革論」,『チェルヌイシェフスキイの生涯と思想』1980. p. 67 参照.
- 3) Н. Д. Добролюбов, "Роберт Оуэн и его попытки общественных реформ" 1859.
- 4) И. А. Конопасевич, "Рочденьеское общество взаимного вспомоществования"

ロシアの協同組合思想の先駆者としてのN. G. チェルヌィシェフスキ

«Современник» Апрель, 1860. стр. 259-274. (出版当時は H. K. とのみ署名されていた).

5) 原著は, R. Owen, "Manifesto of Robert Owen, the discoverer and founder of the rational system of society, and of the rational religion."

6) フランコ・ヴェントゥーリ教授は, この論文をドブロリューボフの文章の拙いことを示す典型的なものとみなしている。

Franco Venturi; *Roots of Revolution*, New York, 1961.

7) チェルヌィシェフスキの協同組合プランについて, ヴォーリン教授は, それがフーリエとルイ・ブランの協同組合構想に近似していると指摘している。

W. F. Woehrin; *Chernyshevskii, The Man and the Journalist*. Harvard Univ. Press. 1971, p. 217.

3. 共同体から社会主義協同組合への移行

チェルヌィシェフスキは協同の原理の実現——彼の場合その完全な実現は社会主義の実現と結びつく——の最終的な成功は, 「歴史的必然性がそれに導くのであるから疑う余地はない」(IV. 742) と考えられていた。しかし, 同時にその実現が決して容易なものでないことを認めており, 彼の表現を借りるならば, 西欧においても「それが, どれだけの時間と労働を必要とするか, どれだけの苦しみと損失をすでに要し, またこれからも要するだろうかということを考えただけでもぞっとする」(同上) という認識があった。

彼は戦後期のはじめにはロシアにおける全国的な協同組合的社会的実現についても, 長期の過渡期と平和的な移行を想定していた。1857年の彼の土地所有論では, 強制を避けて農民との合意の上で協同化を行うこと (IV. 413-414), 政府による土地国有化をふくむ助成によって農村共同体を維持すること (IV. 412) などとともに国有地と私有地が共存する過渡的期間を設け, 私的土地利用を徐々に共同体的利用に移し変えてゆくことを提言していた¹⁾。

彼は, ロシアが当面している資本主義化がもたらす農民のプロレタリア化という危機を克服するためにも, 原則的に政府が国民の福祉のために経済活動に積極的に参与することを認め, またその必要を強調していたのである。(「経済活動と立法」1859年参照)

チェルヌィシェフスキは政府に働きかけて, 平和裡に社会改革を推進しようと努めていた期間, よき先例として, しばしばオウエンの協同組合の原理と社会改革の試みについて言及している。

チェルヌィシェフスキは, 前記の1857年4月の誌雑評の中で, ロバート・オウエンの名をあげ, 彼がアレクサンドル一世から北アメリカの民主主義者たちまでの多様

な国家活動家たちに賞賛された例をとりあげて、「協同組合の原理は本来政治的かたよりに無縁であり、国家制度のあらゆる形態と等しく共存できるのです。……本来、協同組合の原理はまったく非政治的な、純粹に経済的な問題であり、繰り返しますが農業や商業と同様に一つのことを求めています。すなわち平穩、平和、秩序——その政府の形態がいかなるものであっても、すべてのよい政府のもとで存在する幸福です」(IV. 741-742)と記している。当時ロシアでまだ設置を認められていなかった協同組合の導入のための宣伝という面もあるが、彼がこの時期、協同組合を専制政府の下での社会改革のための有力な手段とみなしていたことは確かであろう。

チェルヌィシェフスキイが平和的、漸進的改革路線から革命路線へと方針を転換すべきだと考えたのは1858年の末からだといわれる。そのきっかけとなったのは、政府の農奴解放の計画が彼の予想を裏切って、農民への重い負担を強いるものであることがわかったことと、頻発する各地の農民暴動に刺激されたものと思われる。

1858年の12月に『ソヴレメンニク』誌上に掲載された彼の論文「共同体的所有にたいする哲学的偏見の批判」の中でチェルヌィシェフスキイは読者に向けて、それまで発表してきた農村共同体保持論の誤りを詫びて、自らその撤回を宣言している。

チェルヌィシェフスキイの路線転換の理由は自ら記しているように「共同体的所有の保持に関する問題がどんなに重要に思われても、それはやはり、それが属する問題の一面を構成しているにすぎない。問題となっている人々の福祉の高度の保障として、この原理は、それを自由に機能させるために必要な福祉の他の低度の保障がすでにあらわれている時にのみ意味をもっている」(V. 360)ということにある。検閲を考慮してのえん曲な表現の本意は、彼が農村共同体の存続と発展のための必須条件としていた農民への共同体地の贈与と土地の買戻し金の低額という二条件が、政府案によって保障されなかったということである。彼は自己のそれまでの政府への期待の誤りについて読者に詫びることによって、政府の改革に期待せず、むしろ専制政府そのものの変革をふくめた革命路線を選ぶ必要を説いたことになる。

1858年末からのチェルヌィシェフスキイの戦術の転換については、その内容について不明な点があるが、従来の「上からの改革」への支持から「下からの改革」に重点を移したことは確かである。その過程で、彼はゲルツェンからの非難をうけ、1859年6月、意見の調整をはかるために自らロンドンに出かけてゲルツェンと会談している。この会談については筆者は別の機会にとりあげたことがあるのでここでは省略する²⁾。

筆者としては、チェルヌィシェフスキイが、この頃から「下からの改革」としての非合法活動の準備にとりかかったと考える。

チェルヌシシェフスキイが、この時期から平和的改革論者から革命家に転じたとみなす傾向がソビエト史家ではとりわけ強い。筆者もその見解に基本的に賛成である。しかし、同時に、彼がこの時期以降も ひきつづき最大限の合法的な手段によって啓蒙、宣伝活動にとり組む必要を認めていたことに注目したい。彼は政治的自由を近代社会の本質的な条件とみなしていたし、流刑地の仲間にもその重要性を説いていたほどである⁸⁾。

彼の政治路線は、以後合法と非合法の二面性をもって、ともに専制農奴制の廃止に向けての戦術とされたといえよう。これをチェルヌシシェフスキイの「複眼的」戦術と言ってもよいであろう。

チェルヌシシェフスキイの政治思想に関連して、彼がヴィリュースクからアストラハンに釈放されて間もない1883年12月に英国の新聞“ザ・デイリー・ニューズ (*The Daily News*)”の記者エドムンド・ノーブル (Edmund Noble) に語った告白ともいうべき言葉は非常に興味深くかつ重要である。ノーブルはチェルヌシシェフスキイが英国の現代的な立憲派の政治家たちについて好意的に語ったというのである。ノーブルによればその時チェルヌシシェフスキイが先ず「私はあなたのお国と国民が好きですよ、そしてジョン・ブライトを尊敬しています」⁴⁾と語ったという。またノーブルが、フランスのある一人の経済学者の言葉を引用して「あるフランスの経済学者が、多くのあなたのお国の人たちが考えているように、あなたのことをフーリエやカール・マルクスのような現代思想の巨人たちの一人とみなしていますよ」と語りかけて、チェルヌシシェフスキイを見つめると、彼は微笑を浮かべながら、「もし私に偉大な人々と小人とを比較することが許されるなら、その時は、ロシアのコブデンかブライトくらいにさせていただけばそれに越したことはありません」⁵⁾と答えたという。

ソビエトの史家、コンスタンチン・エリモフスキイは論文「アストラハンにおけるチェルヌシシェフスキイ」⁶⁾ (1964年)の中で、この会見記を全体的に否定的に扱っている。しかし、もしわれわれが、チェルヌシシェフスキイが流刑以前に書いたコブデンやブライトについての評価を読むならば、彼のこの告白が正直なものであることを理解できるはずである。たとえば、彼は自分の論文「資本と労働」の一節で、コブデンの政治活動に言及して、「経済学者たちの意見に従えば、自然的制度の最大の勝利は穀物法の廃止であった。しかし、それはコブデンと彼の同志たちが準備した計画に沿って行われ、議会の立法によって完遂されたのだ」(Ⅶ. 44)と記している。コブデンの偉業について語りながら、彼はロシアにおいていかにして農奴制を廃止し、

新しい民主的立法を設けることができるかを示唆していたのである。勿論、彼はロシアの英国との条件の違いを知っていたが、その上で、彼は英国におけるコブデンとブライトの事業から民衆と協力していかに社会改革を行うかということを学ぶことができると信じていたのである。

私は、このことからチェルヌィシェフスキイが単なる謀略とイデオロギーの人ではなく、西欧の経験に学んで後進的ロシアの改革の方法を探求した現実的な思想家であったと考える。

革命家としてのチェルヌィシェフスキイは民衆とくに農民の動向にたいしてこれを革命のためのエネルギー源とみなしてより多くの注意を払うようになる。彼の論文「変化のはじまりか？」(1861年)の中で彼は農村の中に「自らのおかれている状況を熟慮して、自分の要求をその状況のなかで実現する方法を案出したり、自主的に行動することができる知性と性格とを備えた人々が存在する」(Ⅶ. 887)と書いている。

チェルヌィシェフスキイかまたはその同志によって1861年に書かれたと推測されている檄文「地主地農民へその同情者からの挨拶」は、農民に政府と地主に対する一斉蜂起の準備をするように呼びかけ、彼らの蜂起を支持し、合図を送るための秘密組織があることをほのめかしている⁷⁾。

合法的戦術にせよ非法戦術にせよ、チェルヌィシェフスキイはインテリゲンツィヤを民衆の解放の前^{アバンガード}衛(Ⅶ. 617)と見なしているのである。

チェルヌィシェフスキイの獄中作品『何をなすべきか』(1862年)は、彼のこの時期の協同組合観を知る上でも有益な材料を提供してくれる。

彼の新たな政治的現状認識と、その複眼的二面作戦は、この小説の中にも反映している。

フーリエのファランステールを思わせる組合的理想社会を夢見ながら協同組合的洋裁店を経営する女主人公ヴェーラ・パーヴロヴナに、チェルヌィシェフスキイは協同組合運動とその担い手たちの姿を描いている。

ロブホーフの部屋には、オウエンの肖像が「聖なる老人」として飾られており、彼らの協同組合運動がオウエンの思想や実践を継いでいることを示している。彼らは、その人生のモラルにおいて、オウエンが批判した因襲的結婚観や伝統的宗教観やブルジョア的な私有財産観から解放された「新しい人間たち」として描かれている。とりわけ、女主人公ヴェーラに象徴される解放された女性の姿は、その後のロシアの女性解放運動を鼓舞するものとして意義深いものであった。

ヴェーラの店で働く女性たちのための学習活動が行われていることは、チェルヌィシエフスキイが協同組合運動を単に勤労者の経済的自立のためだけでなく、精神的な自立のための機関とみなしていることを示している。

彼女の店がいかに小規模であろうと、その店が政府からの財政援助を求めず、自らの努力によって調達した資金によって設立され、運営されていることは、彼の組合観がより現実的になり、協同組合の自律的原則に理解を深めたことを意味していると思われる。

ヴェーラやこれを助けるロブホーフやキルサーノフらはいずれも新しいタイプのインテリゲンツィヤであり、民衆の解放のために協同組合活動や啓蒙運動に自らの意志でたずさわっている。

他方、作品中に「特別な人間」として登場するラフメートフは多くの研究者が指摘するように、将来の革命に備えて自らを錬える若者である。彼はすぐれた知性と体力とともに、民衆との意志の疎通ができる新しいタイプの人物として描かれている。

協同組合活動の舞台が、農村ではなく、都市住民に求められていることも、チェルヌィシエフスキイが、協同組合運動の可能性を先ず都市の住民運動としてとらえたことを示している。因みにゲルツェンは当時彼を都市や大学で支持される型の社会主義者とみなしている。⁹⁾ そのことは、次章で述べる二、三の例にも見られるのである。

(注)

- 1) ヴォドラゾフ氏は、チェルヌィシエフスキイにとって共同所有制共同体としての農村共同体の維持が彼にとっての最小限目標であり、共同所有制と共同生産制とを結びつけた共同社会 (=社会主義社会) の実現を最大限目標と考えられるとしている。Водолазов, 前掲書 38 頁。
- 2) Y. Imai; The London Meeting of Herzen and Chernyshevsky in June. 1859, 『工学院大学研究論叢』, No. 8, 1970 所収。
- 3) Н. Г. Чернышевский в воспоминаниях современников в двух томах. Саратов, Том II, стр. 72-73.
- 4) A Russian Political Prisoner. (From Our Correspondent) Astrakhan, Dec. 11. "The Daily News", Dec. 22. 1883, p. 3. (British Library にて所見)
- 5) 同上。
- 6) Константин Ерымовский: Чернышевский в Астрахан. в "Историкобиографический очерк," Астрахан, 1964. стр. 46-48.
- 7) 前掲, 拙稿「ロシア改革論」p. 72-73 参照。
- 8) А. И. Герцен: Собрание сочинения в тридцати томах. Изд-во АН СССР, Москва. 1960. Том XIX, стр. 194.

4. 初期協同組合運動への影響をめぐって

チェルヌィシェフスキの協同組合思想の影響はその後のロシアの協同組合思想や革命運動の中でさまざまな形であらわれた。

60年代のはじめのイシューチンのグループはチェルヌィシェフスキからの影響の下に青年たちが『何をなすべきか』の内容を文字通りに実践しようとした一例である。ヴィレンスカヤ女史の研究報告¹⁾によれば、1863年にモスクワ大学の学生たちの間に生まれたイシューチン・グループは、そのメンバーの多くがチェルヌィシェフスキからの思想的影響を受けていた。グループの中にはその後、革命組織『土地と自由』に合流してゆく革命派のほか、民衆のために学校や図書館などを開いて、啓蒙宣伝活動をしたり、協同組合的な組織を通じて専ら平和的な方法で活動することを志す参加者もあった。

彼らは一方では合法的な「相互扶助協会」(Общество взаимного вспомоществования) と称する組織をつくり、他方で革命のための秘密の政治活動に備えており、イシューチンの甥で後に、アレクサンドル二世の狙撃犯となるカラコーゾフなどもこれに加わっている。

他方の啓蒙グループの有力メンバー、イワノーフ(Д. Л. Иванов)が、チェルヌィシェフスキの『何をなすべきか』の影響を受けて、モスクワでニージニ・ノヴゴロドの同郷の若者たちとともに装本の作業場を開設した。そこでは職人にたいする社会主義についての教育なども試みられたが成功しなかったという。仲間の一人アレクサンドル・ニコルスキイ(А. Николский)はオウエンの『性格形成論』(原題は『新社会観』)の最初のロシアの語訳と出版を試みたが(1865年)、その内容は検閲による削除を蒙っている。

1865年2月にモスクワに上京した、イワノーフの姉エカテリーナ・リヴォーヴナ(Екатерина Львовна)が女性たちによる縫製工場をひらいている。それは文字通り、『何をなすべきか』のヴェーラの店を模したものであった。若い女性たちを中心としたこの店の経営は、資本の不足などで順調にはゆかなかったが、彼らのチェルヌィシェフスキへの心酔ぶりを示すよい例である。

カラコーゾフのアレクサンドル二世の狙撃失敗事件(1866年4月)によって、イシューチン以下の関係者が逮捕され、彼らの試みは壊滅する。憲兵からの第三部長官への報告によれば、彼らは「他の諸都市にまで拡がり、存在している協同組合グループに属していた」²⁾と目されている。しかしその活動は、主に学生仲間や同郷の友人たちの範囲にとどまって、本格的な開かれた協同組合には育たなかった(ヴィレンスカ

ヤ, p. 56)。一般的にこの種の生産協同組合の試みは当時のロシアでは短命で、成功したものは少なかった。

1860年代後半になると、消費協同組合の結成が合法化されて、各地で知識人たちによる消費組合の設立が試みられる。そのうち、キーエフ、オデッサ、ハリコフなどのウクライナの大都市は、消費組合運動が盛んであった。ハリコフの消費組合の指導的人物ニコライ・バルリン (Николай Баллин, 1829-1904) は、チェルヌィシェフスキと英国の協同組合運動の指導者ホリオーク (G. J. Holyoake) の感化をうけて消費組合運動に生涯を捧げたロシア-ウクライナの協同組合運動の先駆的な指導者である。彼の活動は、ハリコフを中心とする消費組合運動を国内的のみでなく国際的な協同組合運動の舞台にまで広げたことでも知られている⁹⁾。

1869年にバルリンは創設間もないハリコフの消費組合から西欧の協同組合の実情視察の旅に出かけている。ドイツ、フランスを廻り、イギリスではマンチェスターやロッチデイルを訪れてその地の協同組合活動家と交流し、ロンドンでは折から開かれていた第一回英国協同組合全国大会 (The First National Congress of British Cooperation) にハリコフの700名の消費協同組合員を代表して出席している¹⁰⁾。

帰国後も、英国の消費組合からの物資の購入を試みたり、組合指導者との文通に努めて、国際的な協同組合の交流に貢献した¹¹⁾。チェルヌィシェフスキが強調した後進的ロシアの発展のための西欧文化との接触の必要性をバルリンは自らの西欧視察で痛感し、自らその実現を試みたといえる。

彼の協同組合関係の翻訳書や啓蒙的パンフレットなどは、ロシア-ウクライナにおける協同組合運動の発展に大きく貢献した。

バルリンは、とりわけロッチデイルの組合に感銘をうけて、その方式をウクライナにもとり入れるべく努力したが、組合員の無理解と官僚の圧迫で、事業は伸び悩んだ。彼は協同組合の全国的連合組織をつくり、国内の新らたな経済流通機構にしようと考えてハリコフでの全国消費組合大会を準備したが、不許可となっている。

バルリンが「土地と自由」の組織に近かったという記録¹²⁾もあるがさだかでない。しかし彼の協力者の中には、ウクライナの民族主義者で、かつて反専制政府運動に加わっていたヴィクトル・ゴズロフがいた¹³⁾。バルリンは協同組合運動をあくまで平和的、漸進的で自由な市民の自主的運動とみなしていたが、協同組合運動の体験を通じて彼が晩年にロシアにおける一種の国家社会主義的協同組合の必要を認めるに至ったことが彼の手紙から知られるのである¹⁴⁾。

ハリコフでのバルリンの協力者としては、組合に付属する裁縫ミシン販売店と、ミシン女工養成所を設けて、そこで女工の組合的教育を行ったエカテリーナ・セミョーノヴァ・ヂャーコヴァ (Екатерина С. Дьякова) がいる。彼女は英語をよくし、自らイギリスの協同組合大会への報告を書き送り、またウィリアム・ペアの『協同組合的土地所有』のロシア語訳を試みている。

これらのチェルヌィシェフスキに鼓舞されたロシアの初期の協同組合運動は困難の多い実験的事業であった。この時期のロシアの協同組合運動の状況については、碩学トミアンツがリアルな報告論文を残している⁹⁾。官憲の弾圧や妨害によって運動は一進一退を繰り返す。しかし、1905年革命以降のロシアにおける協同組合運動は急成長し、全国的に組織がひろがった。1917年の革命前夜には、それは全国的な巨大な経済組織に成長していた。チェルヌィシェフスキが予言したように革命は協同組合にとっても大きな成長のきっかけであった。

(注)

- 1) Э. С. Виленская: Производственные ассоциации в России в середине 60-х годов XIXв. Из истории ишутинской организации, в Исторические записки, 68. Изд-во АН СССР. Стр. 51.
- 2) 同上, Стр. 58.
- 3) В. И. Марков: Пионеры южно-русской кооперации— Н. П. Баллин и его сорудники. Изд. Областного союза потребительных кооперативов Юга России, 1919, стр.
- 4) George J. Holyoake: *The History of Co-operation in England*. Vol. II, London, 1879, p. 425.
- 5) 拙稿:「ニコライ・パールリンの手紙——初期ロシア協同組合員のイギリス協同組合誌への投稿——」,『ロバート・オウエン協会年報Ⅶ』, 1982 所収参照。
- 6) Советский Энциклопедический Словарь. Изд-во “Советская Энциклопедия” Москва, 1980, стр. 106.
- 7) 拙稿:「ハリコフの最初の消費組合 (1866-71年) とニコラーイ・パールリン」『一橋論叢』 Vol. 89, No. 1, (1983) 所収, p. 18-19.
- 8) ‘Social Life and Co-operative Ideas in Russia’ (Extract from a letter by Nicolas Balline of Kharkoff) Interpreted by E. V. N. *The Co-operative News*, January 7th, 1888. (Manchester の Cooperative Union Library にて所見)
拙稿:「ニコライ・パールリンの手紙 “ロシアにおける社会生活と協同組合思想” (1888年) をめぐって」:『工学院大学研究論叢』 No. 21, 1983 所収, 参照。
- 9) В. Тотомианц: “Н. П. Баллин о русском кооперативном движении 70-80х годов.”

むすび

ソビエト革命をめぐるロシアの協同組合の問題は、すでにこの小論のテーマを越えている。しかし、少年時代からチェルヌィシェフスキイの思想的影響を強く受けて育った革命家レーニンが、1902年にチェルヌィシェフスキイの小説と同名の『何をなすべきか』と題する政治的論文を書いたことと、彼が今日のソ連の協同組合の基礎的組織原則をつくり出したことには一言、触れておくべきであろう。

レーニンは、自らの『何をなすべきか』の中で、かつてチェルヌィシェフスキイが書き得なかった革命党の組織論を展開し、ボリシェヴィキ党の原則を確立した。1917年のロシア革命とそれにひきつづく社会主義経済制度の建設がこれらのレーニンの理論に負うところが大きいことは、改めて説くまでもない。

社会主義政権のもとの勤労者の協同組合の創出という歴史的課題を担ったレーニンは、革命当初から協同組合運動についてさまざまな試みを行っている。まず、政権獲得直後の1917年12月末にレーニンは「消費コミューンにかんする布告草案」¹⁾で、ロシアの全住民を消費＝生産コミューンに強制的に組織する構想を記している。また、1918年3月の執筆になる「ソヴェト権力の当面の任務」の最初の草稿の中でも協同組合について論じており、その中で「協同組合は、資本主義社会のなかの小さな孤島としては商店である。協同組合は、もしも土地が社会化され工場が国有化されている社会全体を包括するならば社会主義である。」²⁾と論じている。さらに1918年12月には『モスクワ中央労働者協同組合代表者会議での演説』の一節で、彼は「社会主義とは単一の協同組合なのである」³⁾とさえ語っている。これらの一連のレーニンの発言と構想は、彼が社会主義にとって、協同組合が基本的な構成要素であると考えていたことを示すもので、その点では、まさにチェルヌィシェフスキイの協同組合的社会主義思想を引きつぐものといえる。

レーニンは、革命後の協同組合の存続をめぐるボリシェヴィキたちの間での討議で、協同組合廃止論に反対し、既存の協同組合の保全の必要を説き、それが社会主義経済建設の基盤として不可欠のものであることを強調した。同時に彼は、既存の協同組合をソビエト政権の指導のもとに労働者生産協同組合に改編するように努めたのである。そのことが、従来の協同組合の原則と衝突し、協同組合運動の混乱をもたらしたことは否定できない。レーニンは、一時試みた協同組合の国有化政策が、協同組合側からの反発に会って成功しなかったためにその後、国有化政策を破棄して協同組合の指導者たちとの和解を計っている。その後は社会主義政権下の協同組合の相対的な独立性自主性を認め、社会主義国家と協同組合の関係の独自の発展をはかった。

チェルヌィシェフスキイは、その生前に社会主義国家と協同組合との関係について具体的な構想を示すことはできなかった。しかし彼は原則的に国家の計画を協同組合へ強制することは反対であった。すでに本論で述べたように彼は勤労者の人間的要求に基づき、組合員の自由な意志の尊重を前提にした社会主義的協同組合を構築することを夢見ていた。国家の役割は組合への干渉ではなく、彼らの自立のための介添役に限定されていたのである。

今日、ソ連東欧諸国、ヴェトナムをはじめとする社会主義諸国は、国際協同組合連盟（ICA）に加盟して活動している。それらの運動を筆者自身が垣間見た限りでは、協同組合組織は社会主義体制下で見直され、その協同組合政策は組合員の自主性を尊重し、経済のみならずその文化的役割を重視する方向に向かっているように見うけられた。チェルヌィシェフスキイの自由な社会主義的協同組合思想は、そのような状況の中で、今日なおその意義を検討するに価するように筆者には思われるのである。

（注）

- 1) В. И. Ленин : Полное Собрание Сочинений (Изд. пятое) М. 1962, том 35, стр. 208. 『レーニン全集』大月書店版、第26巻、425ページ。
- 2) Там же, том, 36, стр. 161. 同上, 第27巻, 218~219 ページ。
- 3) Там же, том, 37, стр. 206. 同上, 第28巻, 208 ページ。

【付記】

本論文は、1985年10月31日から11月5日にかけて、ワシントンD. C. で開催された第三回ソ連・東欧研究世界大会（Ⅲ World Congress for Soviet and East European Studies）の第一日の「チェルヌィシェフスキイについての最近の研究」に関するパネルにおいて筆者が報告した英文原稿 “N. G. Chernyshevsky as the Pioneer of Russian Cooperative Movement” の日本語版である。ただし、大会当日の報告では時間の制約から、いくつかの部分を要約、または省略せざるを得なかった。論文の題名も、日本語版では題名を「ロシア協同組合思想の先駆者 N. G. チェルヌィシェフスキイ」としているが、大会報告では副題を「ロシア協同組合運動の先駆者」と改めてある。

（いまい よしを 本学社会思想史・経済学教授）